

## 省筆の訳出：「晶子源氏」の再検討

田村，隆  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8958>

---

出版情報：文献探究. 43, pp.27-38, 2005-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 省筆の訳出

―「晶子源氏」の再検討―

田村 隆

一

現代の口語に訳した源氏物語がほしいかと、わたくしが問はれることになりますと、わたくしは躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>せず、ほしいと申します。わたくしは此物語の訳本を切に要求いたしてをります。

これは、与謝野晶子『新訳源氏物語』<sup>1</sup>に寄せられた森鷗外の序である。鷗外は晶子の訳業に際し、その校正を担当したのであった。明治四十五年五月二日の日記にこう記している。

二日（木）。雨。与謝野晶子のために訳本源氏物語の校正に着手す。

この年、金尾文淵堂から第一冊が上梓された『新訳源氏物語』は、五十四帖通しての『源氏物語』口語訳としては嚆矢となるものであった。以降、『源氏物語』の口語訳は種々試みられることになる。それらは、『国文学 解釈と鑑賞』の四十八巻十号（昭和五十八年七月）

所収の「口語訳（付・外国語訳）一覧」や『源氏物語講座』（勉誠社版）第十巻の「現代語訳」の項、あるいは吉海直人「作家の訳と研究者の訳」<sup>2</sup>などで一望できるが、そのうち今、作家の訳したものを中心に主な口語訳を並べてみると、

与謝野晶子『新訳源氏物語』四冊

（金尾文淵堂、明治四十五―大正二年）

与謝野晶子『新々訳源氏物語』六冊

（金尾文淵堂、昭和十三・十四年）

谷崎潤一郎『潤一郎訳源氏物語』二十六冊

（中央公論社、昭和十四―十八年）

窪田空穂『現代語訳源氏物語』八冊

（改造文庫、昭和十四―十八年）

谷崎潤一郎『潤一郎新訳源氏物語』十二冊

（中央公論社、昭和二十六年）

舟橋聖一『源氏物語』二冊（『世界名作全集』三十七・三十八、

平凡社、昭和三十五・三十六年）

谷崎潤一郎『潤一郎新々訳源氏物語』十冊別巻一冊

(中央公論社、昭和三十九・四十年)

円地文子『源氏物語』十冊(新潮社、昭和四十七・四十八年)

田辺聖子『新源氏物語』五冊(新潮社、昭和五十四・五十五年)

中井和子『京ことば源氏物語』三冊(大修館書店、平成三年)

橋本治『窳変源氏物語』十四冊(中央公論社、平成三―五年)

瀬戸内寂聴『源氏物語』十冊(講談社、平成八―十年)

尾崎左永子『新訳源氏物語』四冊(小学館、平成九・十年)

などが挙げられる。

作家の訳については、吉海氏が「訳は決して原作と同一ではなく、むしろ積極的に創作(作家の解釈)として認識すべきであろう」と述べるように、訳出の過程で作家の自由な個性が発揮され、様々なバリエーションが発生するのである。

例えば、『源氏物語』には読者に物語内容を想像させる省筆の辞として、「思ひやるべし」という表現があるが、晶子は物語中に三例ある「思ひやるべし」を、

猶言葉は多かつた。

(須磨)

想像されないこともない。

(須磨)

内容が想像されないでもない。

(少女)

と訳す(『新々訳源氏物語』)。「べし」の解釈において、「想像して

ほしい」などとする現行の諸注釈とは異なっている。一方、谷崎の訳は、

いろいろとお書きつくしになるお言葉は、お察しすることができません。

(須磨)

そのお言葉は思いやられます。

(須磨)

おん文の中が思いやられるではありませんか。

(少女)

の如く、語り手の立場から述べた感想と解しており(『潤一郎新々訳源氏物語』)、こちらの訳も個性的である。このように、一つの表現をめぐるでも、訳文の意味合いはそれぞれに異なるのである。

## 二

物語中、最初に現れる省筆は、夕顔巻の、

惟光いさゝかの事も御心にたがはじと思に、をのれも隈なきすき心にて、いみじくたばかりまどひありきつゝ、しひておはしまさせそめてけり。このほどの事くだくしければ、例の漏らしつ。

というものであるが、「このほどの事くだくしければ、例の漏らしつ」という省筆がどのように訳されているか、諸訳をいくつか並べて

みよう。

その辺のいきさつはくたくしいから、例の如く、こゝには省略することにしよう。  
(谷崎訳)

その辺のいきさつはくたくしいので、例の如く省略しましょう。  
(谷崎新々訳)

この辺りのことは、一々書いていると、くたくたくしいので、筆を省くことにする。  
(円地訳)

この辺のいきさつは、もう、くどうおっさかい、例によつて省きます。  
(京ことば訳)

このあたりの話はくたくたくしくなりますので、いつものように省かせていただきます。  
(寂聴訳)

ここに与謝野晶子の訳がないのは、『新訳源氏物語』(以下『新訳』)と『新々訳源氏物語』(以下『新々訳』)では共に省筆の部分が削られているためである。『新訳』は晶子自身、「必ずしも原著者の表現法を襲はず、必ずしも逐語訳の法に由らず、原著の精神を我物として訳者の自由訳を敢てしたのである」(『新訳源氏物語の後に』大正二年十月)と述べているように、抄訳である。そのため該当の箇所を逐語的に抽出することが出来ない。後年訳された『新々訳』は全訳ではあるが、それでもこの箇所については、「いろいろと苦心をした末に源氏を隣

の女の所へ通はせるやうにした」以降の省筆の表現を削り、改行して「女の誰であるかを是非知らうともしないと共に」と次の話題を続けている。この点において、他の諸訳とは異なる性格を持つ。晶子の訳は、全訳の『新々訳』でさえ、省筆の部分を削ってしまう例が散見される。他に紅葉賀巻の例でも、

この御中どものいどみこそあやしかりしか。されどうるさくてなむ。

という箇所を、

つまらぬ事までも二人は競争して人の話題になることも多いのである。

というように、省筆の一文を削っているのである。

もちろん、抄訳の『新訳』では削除され、全訳の『新々訳』では残されるといった省筆も見られる。蜻蛉巻冒頭の例を掲げておく。

かしこには、人々、おはせぬを求めさはげどかひなし。物語の姫君の人に盗まれたらむあしたの様なれば、くはしくも言ひつゞけず。

山荘の人人は朝になつて浮舟の君の居ないのに驚いたが、もう何処を捜して見ても其人の影は見出すことが出来なかつた。京の母親からは昨日の使が行つたきり帰らないのを気にして追使を寄

越した。

(新訳)

宇治の山荘では浮舟の姫君の姿の無くなつたことに驚き、いろいろと捜し求めるのに努めたが、何のかひもなかつた。小説の中の姫君が人に盗まれた翌朝のやうであつて、この傷ましい騒ぎは委しく書くことが出来ない。

(新々訳)

『新訳』は抄訳の過程で省筆が削り取られ、一方の『新々訳』ではほぼ原文に即して訳しているのである。このような例は他にも多い。ただし、この『新々訳』における省筆の訳し方にも、実は次に見るようないくつかの特徴がある。

### 三

省筆の口語訳について、拙稿「与謝野晶子訳『紫式部日記』について」では「晶子は『紫式部日記』に見える省筆に対し、その理由を補ったり、あるいは意識的にニュアンスを異にして訳している」と述べた。その折にも多少触れたが、『源氏物語』についても同じ事情は窺える。以下の考察では、比較のため原文に次いで晶子訳と谷崎訳を並べて掲げるが、晶子訳は全訳である『新々訳』を用いる。また、谷崎訳については、敬語体に改められ、語りの要素が強まったとされる『潤一郎新々訳』を用いることとする。

さて、具体例を挙げよう。前稿でも掲出したが、まずは夕顔巻の、

こまかなることどもあれど、うるさければ書かず。

という省筆について、谷崎は、

いろいろこまやかな言葉などもありますけれども、うるさくなるから書きません。

とそのまま訳すところを、『新々訳』では、

細細しい手紙の内容は省略する。

として、「うるさければ」の部分をと落としてしまう。つまり省筆の存在自体は活かしつつも、主観的なコメントを排する形で一部訳文を修正しているのである。

このような例は他にも挙げることができる。

よろこびきこえ給さま、書きつゞけむもうるさし。(須磨)

という一文について谷崎は、

女御のお喜びなされた様子は、くだくだしく書くまでもありません。

と訳すのに対して、晶子訳には、

こんなことを云つて喜んで女御のことなどは少し省略して置く。

のように、やはり「うるさし」の部分がないのである。もう一例、蜚卷の例を引いておく。

ほとゝぎすなど必ずうち鳴きけむかし、うるさければこそ聞きもとめね。

時鳥なども必ず啼いたことでしょう。そういう細かいことまでは、うるさいので聞き漏らしましたけれども。

(谷崎訳)

杜鵑などは屹度鳴いたであらうと思はれる。筆者は其処まで穿鑿はしなかつた。

(晶子訳)

ここでもまた、「うるさければ」にあたる訳がない。晶子は省筆の訳出にあたって、多くの箇所、このような処理を施している。尚、右の三例についても、『新訳』では省筆そのものがないが、それは先に述べた抄訳の事情によるものである。

以上の考察から、省筆の口語訳に際しての態度は訳者によって三つに分かれていることがわかる。一はそのまま逐語的に訳すことである。各種の古典文学全集に付されたいわゆる「研究者の訳」は当然ながらこの立場を採り、作家の訳でも谷崎訳・円地訳・寂聴訳などはこれに近い。

二に、省筆を即物的に不要とする立場である。省筆部分のほとんど

を削り取ってしまう。晶子の『新訳源氏物語』をはじめ、抄訳にはこの傾向が認められ、田辺訳や尾崎訳などにも共通する。『新々訳』にも一部見られた。省筆の辞そのものは無論あらゆる直接変更をきたすものではないから、このような態度も当然あり得よう。また、『変源氏物語』は語りが一人称に改められた口語訳であるが、この訳でも省筆は現れない。

三に、省筆のニュアンスを異にして訳す方法である。本節で述べたように、『新々訳』が採用したのは主としてこの方法であった。それは、「うるさければ」の類のコメントを処理するのみに留まらない。

#### 四

物語の中の省筆は、語り手が顔をのぞかせる草子地としての役割を担う。省筆の訳出箇所は、晶子が草子地の構造をどのように解釈しているかを考える糸口となる。

晶子訳の特色について、北村結花『源氏物語』の再生―現代語訳論<sup>10</sup>は次のように述べる。

與謝野訳は、原文の「物語」という語に「小説」という語を対応させ、「いひつづげず」を「書くことができない」としている。単に言葉を置き換えたという問題ではない。「小説」の読者は物語の享受者とは異なり、人格を特定できない。與謝野晶子は『源氏物語』を、「筆者―作品―読者」という近代の小説に通ずる享受形態の中に投げ込んだのである。

また、同「いまどきの『源氏物語』——円地文字訳から瀬戸内寂聴訳」<sup>11</sup>においても、

與謝野訳には①原文の「物語」という語彙の「小説」への置換、

②草子地や敬語の大幅削除による語り手の存在感の希釈、③「た」止め主体の文末辞や長い連体修飾節、「彼」、「彼女」といった人称代名詞など、明治以降の外国文学の翻訳作品にみられる文体、明治以降に作られた（あるいは使用頻度の増した）語彙が醸し出す近代色、西洋色といった特色が挙げられる。

と指摘する。

北村氏は、「筆者—作品—読者」という近代の小説に通ずる享受形態」の枠組に基づく「草子地や敬語の大幅削除による語り手の存在感の希釈」を指摘する。氏はさらに、「物語的要素を徹底的に削除」しているとも述べるが、このことについてはいくばくか再考の余地ある部分も残されているように思われる。

例えば、「原文の「物語」という語彙の「小説」への置換」であるが、たしかに晶子の訳には、蜚卷の物語論周辺を始め、六十例近くも「小説」の語があるのに対し、「物語」は数例に留まり、それすらも『赫耶姫物語』、『竹取物語』、『伊勢物語』などの固有名詞に限られる。

しかし、そこで用いられた「小説」は、近代小説、いわゆる novel として意味上も置換されたと把握してよいのであろうか。野口武彦『一語の辞典 小説』<sup>12</sup>に「小説の約定」として紹介されるような「物語の非・人格化」(impersonalization of narrations)、すなわち「語り手と聴

衆とが同座する「現場性」の消去を明確に意識したものであったのかどうか。

晶子自身、前掲「新訳源氏物語の後に」において、

源氏物語は我国の古典の中で自分が最も愛読した書である。正直に云へば、この小説を味解する点に就いて自分は一家の抜き難い自信を有つて居る。

の如く『源氏物語』自体に対しても「小説」の語を用い、他にも、「小説の紫式部」、「紫式部が小説を書くに到つたのは」、「源氏物語以前の小説は」（「紫式部の事ども」）、<sup>13</sup>『源氏』のような写実小説」（「紫式部新考」）<sup>14</sup>など様々な文章で「小説」の語は散見され、それほど意識して「物語」と「小説」を区別しているとも思われない。加えて、『新々訳』当時の「小説」の説明にも、

しょうせつ（小説）「(伊) novella (英) novel」時代ノ世態、人心ノ觀察ヲ背景トシ、想像的ナ人物或ハ出来事ヲ中心トシ、現実ノ世界ニ於テ起リ得ルヤウナ幻想ヲ起サシメル散文ノ物語。……我国ノ源氏物語ハ小説トシテ世界最古ノモノデアラウ。(土居)

〔『国民大辞典』富山房、昭和十年〕

とあり、『源氏物語』を「小説」の括りの中に置く。「物語」の項を見ても、「物語ハ古代小説・中世小説ノ中心ヲナスモノデ、殊ニ源氏物語ヲ中心トスル小説物語ハ古典文学ノ重要ナ方面ヲ占メルノミナラズ、近世小説モ物語カラ直接的モシクハ間接的ニ影響ヲウケテキル」

(久松) のような記述がある。

『源氏物語』は早くから「小説」と呼ばれてきた。坪内逍遙は『小説神髓』の中で、「譬ば式部がものしたりし源氏の君の物語ハ全世話の小説なれども」のように用い、晶子が『明星』巳年第十一号(明治三十八年十一月)の「出版月評」で「さるにてもこゝにいたく打驚かされつるは、国文の学士藤岡作太郎先生の新著『国文学全史』なりけり。われは今をさなきものに乳ふくませ、針もつ手のいとまぬすみて読み耽りぬ」と評した藤岡作太郎『国文学全史 平安朝篇』(東京開成館、明治三十八年刊)においても、「小説」の語は頻出する。<sup>15</sup>

平安朝第一の小説はと問わば、誰か直ちに源氏物語を以て答えざらん。

藤原氏の榮華は道長に窮まりぬ、平安朝小説の發達は源氏物語に窮まりぬ。

そして、「小説」の語を『源氏物語』口語訳で使うということならば、複数の国文学者によって訳された『全訳王朝文学叢書』(大正十

四—昭和二年)でも、数は少ないながら、  
嘸や、あの古小説中の主人公なる交野少将の冷笑を受けられるこ  
とでがなあらう——全く、つまらない物語なのである。(帚木)

このやうな住居などは、古い小説中にも哀れな場面に写されてあ  
る。  
(末摘花)

の如く、すでに「小説」の語を用いている。また、芥川龍之介の『芋  
粥』(大正五年八月)にも、

一体旧記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、余り興味を  
持たなかつたらしい。この点で、彼等と、日本の自然派の作家と  
は、大分ちがふ。王朝時代の小説家は、存外、閑人でない。

と「王朝時代の小説家」の語が見える。<sup>16</sup>

これらもまた、「物語」と「小説」がほぼ同義として用いられてい  
るものであつて、特に二つを峻別する意識があつたとは言えないので  
はないか。「小説」の語の使用は、晶子独自の志向と見るよりは、当  
時の用語意識に基づいた単純な置き換えと考へた方が自然ではあるま  
いか。

また、「筆者」の用語においても、たしかに、

その時分に筆者はこの傷ましい出来事に頭を混乱させて居て、  
其等のことを注意して聞いて置かなかつたのが残念である。

(須磨)

その外の人人からも多くの歌は詠まれたが、書いて置く必要が  
ないと思つて筆者は省いた。

(若菜下)

この夜出来た詩歌は皆非常に面白かつたが、片端だけを例の至  
らぬ筆者が写して置くのも疚しい気がして総てを省くことにし  
た。

(鈴虫)



というように使用例は散見されるものの、元々『源氏物語』には「書かず」を用いた省筆が十三例見られるように、「書く」という側面は特に避けられてはいない。<sup>17</sup> 藤井貞和氏も、「いわば語る」と書くこととの、古代作家の内部における、どこかあいまいな関係」を指摘している。<sup>18</sup> 「筆者」の語の使用が直接に「語り」からの逸脱を示すとは限らないのではあるまいか。北村氏の述べるように、敬語の削除など、「語り」の要素が減殺された部分も認められるのは確かだが、一方でおなじ「物語」としての性格を残した箇所もあるのではないか。これらの点に留意した上で、もう一度、晶子訳の省筆を眺めてみたい。

## 五

近時、島内景二『文豪の古典力―漱石・鷗外は源氏を読んだか』は、

晶子は、この「草子地」の部分の口語訳にほとんどすべて失敗している。「登場人物たち」が会話を交わしたり心の中で思っている世界とは別次元に、物語の構造を決定している「語り手」があり、さらにその外側に「作者」の次元と「読者」の次元があるという多層構造が、晶子には頭でわかっていたとしても、訳文にはほとんど活かされていない。

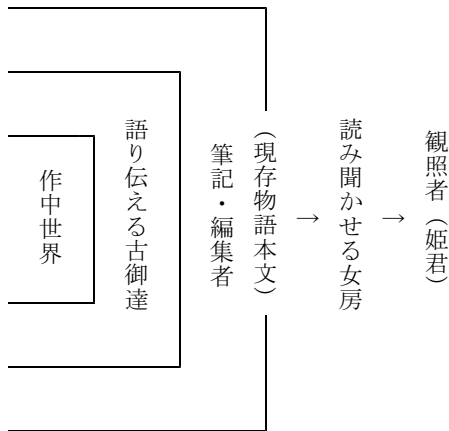
と述べている。「失敗」の具体的な事例が挙がっていないのでどういった草子地を指すのか判然としないが、これまで検討してきたように、少なくとも省筆の訳出に関しては、晶子は少なからず意識していたと

見て良いであろう。「多層構造」を織りなす草子地の中でも「高度の技法と考えられる」と中野幸一氏によって述べられるこの省筆について、晶子はどのような態度をとったのか。

玉上琢弥「源氏物語の読者」は作者と読者について、

『源氏物語』は、「いづれの御時にか」おわした、その光る源氏らを実際に知っている人（「夕顔」の巻結文にいわれる「見む人」）、古御達がいひ出話をする。それを筆記し編集して、この書にした、というたてまえである。

と述べ、その関係を、



と図示する。また、阿部秋生『源氏物語の物語論―作り話と史実―』<sup>22</sup>

も、「筆録者といつても、聞いたままに記録するだけではなく、書くべきことを選び、文章表現として体をなすように言葉を選んで形を整える作者であろう」、「文章の背後に、この筆録者に話を提供している人物が想定されている」と説明している。晶子訳に見える「筆者」の例は先に紹介した。

そして、この観点に立つとき、以下の省筆に際して晶子が試みた訳出は大変興味深い。まずは椎本巻の例を掲げる。

中納言殿よりも、宮よりも、をり過ぐさずとぶらひきこえ給。うるさく何となきこと多かるやうなれば、例の、書き漏らしたるなめり。

この省筆部分を谷崎は、

が、煩わしい、何でもないことが多いようですから、例によつて書き漏らしたのでしよう。

と訳す。一般の古典文学全集の類もほぼこれに近い訳文である。ところが、一方の晶子は、

例のやうに大したことも書かれてないのであるから、話を伝へた人も、其等の内容は省いて語らなかつた。

と訳している。原文では明示されていない、玉上氏の云う「語り伝える古御達」が、晶子の訳には「話を伝へた人」という実に明瞭な形

で登場するのである。次に宿木巻から。

げにかくにぎはしく花やかなる事は見るかひあれば、物語などにまづ言ひたてたるにやあらむ、されど、くはしくはえぞ数へたてざりけるとや。

ほんに、こういう賑やかな花々しいことは、いかにも見栄えがしますので、昔の物語などでもまずそのことを言い立ててあるのでしょう。ですがこのたびの儀は、まだこれだけでも詳しく数え尽くしてはいないのですとやら。(谷崎訳)

かうした派手な式事は目にも眩いものであるから、小説などにも先づ書かれるのはそれであるが、自分に語つた人は一人数へて置くことが出来なかつたさうであつた。(晶子訳)

晶子の訳は「さうであつた」というような表現を用いて、「話を伝へた人」、「自分に語つた人」から直接聞いたかのように説明しているのが注目される。原文にない主語、すなわち「古御達」を明示する点において、草子地が印象づけられるのである。それに対して、谷崎訳では原文にほぼ忠実である。そして、ここにも「小説」の語が見えるが、「かうした派手な式事」の縷述はやはり「近代小説」よりも「物語」の本領であろう。

このような例もある。

かやうの筋は、こまかにもえなんまねびつゞけざりける。(宿木)

まあそういったいきさつについては、あまり詳しいことまでは書き記すわけにも行きません。

(谷崎訳)

かうしたことを細述することはむづかしいと見えて筆者へ話した人はよくも云つてくれなかつた。

(晶子訳)

これも同じ現象である。「筆者へ話した人」という言葉を補うことで、作者・登場人物とは異なる第三者の存在を明確に印象づける。また、「むづかしいと見えて」といった文言も、語り手ないし筆録者が推し量ろうとする感情を思わせる。このような「語り伝える古御達」の介在にあえて筆を費やしていることは、北村氏の言う、「語り手の存在感を稀釈し、小説としての『源氏物語』を指す」という方向とはなじまないように思われる。当時の読者がそこに「近代小説」らしさを感じ取ったかについて疑問の余地なしとしない。ともかくも、物語の終わり方に至って、こういった「古御達」への言及は多い。先に述べた「うるさければ」の類を削除するといった処理が物語前半に特に目立つのと対照をなす。口語訳を進めるにつれ、草子地に対する晶子の認識が次第に深まっていると考えてよいのではあるまいか。

さらに、「古御達」の昔語りとともに、源氏達と間近に接した人々の記録資料をも叙述の材料に用いていることを、晶子は示唆している。

くはしう言ひつづげんにことかくしきさまなれば、漏らしてけるなめり。さるは、かうやうのおりこそおかしき歌など出でくるやうもあれ、さうかくしや。

(賢木)

あまり詳しく語りつづけますのもことごとしいようなので、書き漏らしたこともあるでしょう。本来ならばこういう折にこそ、おもしろい歌などでもできるものですが、それらが落ちたのは物足りないことです。

(谷崎訳)

こんな場合に立派な詩歌が出来てよいわけであるから、宮の女房の歌などが当時のくはしい記事と共に見出せないのを筆者は残念に思ふ。

(晶子訳)

これは、阿部氏が「見聞者からの伝承のしかた」を「見聞者が語るのを聞いている場合」と「見聞者が書きとめたものを読んでいる場合」とに分類するところの後者に当たる。もう一例見よう。

これは御わたくしぎまに、うちくのことなれば、あまたにも流れずやなりにけん、また書き落としてけるにやあらん。

(少女)

これは表向きならぬ内々のおんことですから、多くの方々にはお流れが廻らなかつたのでしょうか、それとも書き漏らしたのでしょうか。

(谷崎訳)

この行幸は御家庭的なお催しで、儀式ばつたことではなかつたせいなのか、官人一同が詩歌を詠進したのではなかつたのか其日の歌は是れだけより書き置かれて居ない。

(晶子訳)

これらは「古御達」の語りのみならず、参照すべきメモないし記録

をも利用していると表明するものである。私家集などの編纂において、詠草が断片的に記し留められた覚書が種々存在したと思しい、そういった文化史的な背景にも負う所のある記述と考えられるであろう。宿木卷の、

こんな場合の歌は型にはまつた古臭いものが多いに違ひないのであるから、態態調べて書かうと筆者はしなかつた。上流の人とても佳作が成るわけではないが、標だけに一二を聞いて書いて置く。(宿木)

に見える「態態調べて」云々にも、やはり何らかの依るべき資料を晶子が読者に意識させていることが窺える。

以上のような例では、玉上氏の言う「筆記・編集者」と「語り伝える古御達」とは、明らかに二者として存在する訳し方がなされている。原文にはあくまでもそういった主語の明示がないことに注意したい。

これらを見る限り、むしろ晶子は原文が持つ語りの構図を際立たせるような形で訳出しているのであり、そのことは他の訳と比べてみても明らかである。晶子は草子地の機能を的確に捉えていたと考えるべきであろう。それは早く昭和十三・十四年の試みであった。晶子の訳す草子地には、北村氏の言うように「物語的要素を徹底的に削除」したとも、あるいは島内氏の評するように「失敗」とも、一概には言えない側面が確実に存在するのである。その訳出方法は決して平板化を目したものではなかつた。語りの構造は、むしろ立体的な色彩を強めて顕れ、そういった意味において、晶子の訳は「物語」としての面影を留めるのである。

## 注

- 1 本文の引用は、『鉄幹晶子全集』第七・八卷（勉誠出版、平成十四年）により、『与謝野晶子の新訳源氏物語』（角川書店、平成十三年）を適宜参照した。
- 2 『鷗外全集』著作篇、第二十一卷（岩波書店、昭和十三年）による。
- 3 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 籀木』至文堂、平成十一年。
- 4 「思ひやるべし」については、拙稿「思ひやるべし」考―源氏物語以後の省筆―（『語文研究』九十八、平成十六年十二月）を参照されたい。
- 5 昭和十三・十四年刊行の金尾文淵堂版による。
- 6 『谷崎潤一郎全集』第二十五―二十八卷（中央公論社、昭和四十一年）による。
- 7 『文献探究』四十一、平成十五年三月。
- 8 因みに、英訳などもこの訳し方である。前述、夕顔巻の例について、アーサー・ウェリー訳は「The details of the plan by which he brought this about would make a tedious story, and as is my rule in such cases I have thought it better to omit them」とし、サイデンステッカー訳は「But the details are tiresome, and I shall not go into them」と簡潔である。
- 9 草子地については、榎本正純『源氏物語の草子地―諸注と研究―』（笠間叢書、昭和五十七年）など参照。
- 10 『文学』三一―、平成四年一月。
- 11 『国際文化学』創刊号、平成十一年九月。
- 12 三省堂、平成八年。
- 13 大正五年十一月。『定本與謝野晶子全集』第十五卷（講談社、昭和五十五年）所収。
- 14 昭和三年一月。『晶子古典鑑賞』（『与謝野晶子選集』第四卷、春秋社、昭和四

十二年)所収。

- 15 引用は、平凡社東洋文庫版(昭和四十六―四十九年)による。
- 16 『芥川龍之介全集』第一卷(岩波書店、昭和五十二年)による。
- 17 拙稿「省筆論―源氏物語の叙法―」『文学』平成十五年十一月・十二月。「筆者」の語は『湖月抄』など古注以来用いられ、『一葉抄』や『湖月抄』のほか、「日本文学全書」(博文館、明治二十三・二十四年)には、「記者」の語が見える。
- 18 「草子地」論の諸問題―物語世界の語り手―『国文学』昭和五十二年一月。文春新書、平成十四年。
- 19 『うっほ物語』の草子地』『宇津保物語論集』古典文庫、昭和四十八年。
- 20 『源氏物語研究』角川書店、昭和四十一年。初出は『女子大文学』昭和三十年三月。
- 22 岩波書店、昭和六十年。

(たむら たかし・九州大学大学院博士後期課程)